①2008年9月号179号

# 通信小海

日本同盟基督教団小海キリスト教会　牧師　水草修治
会堂・牧師館　南佐久郡小海町大字小海四三五五―二七
〒三八四-一一〇二　TEL〇二六七-九二-四七七六
〒振替００５３０-０-６１６８３

＜今月の御言葉＞

「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい。」

マルコ一章十五節

## 三億円事件と家庭

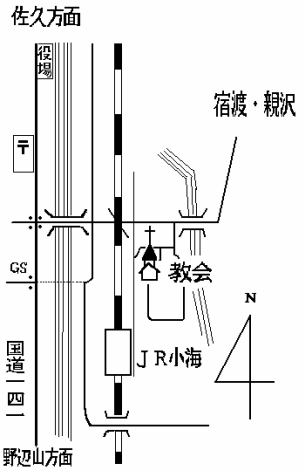
牧師　水草修治

一九六八年十二月十日、東京都府中市で三億円事件が起こった。東芝の府中工場の従業員のボーナスを運ぶ現金輸送車が、白バイ警察官を装った犯人にまんまと盗まれたのである。当時の三億円といえば現在の三十億円ないし五十億円にあたり、手口も鮮やかだったから、事件は日本中の話題となった。筆者十歳のときである。

三億円事件の後、現金輸送は危険であるということになり、それまで全国で手渡しされていた給料が、銀行振込で支給されるのが普通になった。筆者の子ども時代の記憶には、月に一度、父が母に給料袋を渡す場面が残っている。月末のある日、帰宅した父が胸ポケットから茶封筒を出して差し出す。母はいつになく改まった態度で両手で袋を受け取ると「お疲れ様でした」とぺこりと挨拶をする。「父さん、かっこいいな」と思ったものである。どの家庭でも同じような儀式が月に一度は行なわれていただろう。家庭によっては、その日の夕食はお父さんだけ一品多く付くということもあっただろう。

ところが、給料の銀行振込が一般化すると、各家庭では月に一度の儀式が自然、消えうせることになる。子どもは、お金というものはお母さんが銀行から引き出してくるものと思うようになった。そんな中で、お父さんたちは自分が家族のために働いていることをどのようにしてＰＲするようになっただろうか。会社から帰ってくると、不機嫌に一言も口をきかず、いかにも疲れ果てたという態度をとることによって、「俺はおまえた

## 見晴台の教会へどうぞ




### 集会あんない

**日曜日**　朝礼拝　午前十時から十一時半
夕礼拝　午後八時から九時

＊海尻・川上・南相木・甲斐大泉で毎月家庭集会をしています。

＊個人的な聖書勉強や個人的なご相談にも乗ります。

ちのために、一日、身を粉にして働いたんだぞ。」とＰＲするようになったのではないかと、内田樹教授は言っている。そして、そうした不機嫌による自己ＰＲ法が、家庭を支配し、学校も支配していると推察している。夫の不機嫌に対して、妻もむっつりとして「あたしだって一日家事やパートで疲れているのよ。家庭に貢献しているのよ。偉いのよ。」と無言のＰＲをし、子どもは子どもで「ぼくも受験勉強で疲れてるんだ。」とむっつりＰＲをするという具合である。

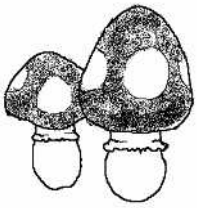
この教授が、ある高校のクラスを見学した。「起立・礼」という儀式は相変わらず行なわれていたが、その起立と礼がこれ以上ダラダラできないほど、ダラダラとする。それは、「俺たちは、疲れてるんだぞ。授業聞いてやってるんだぞ。」という無言のＰＲなのである。

不幸なことである。風が吹けば桶屋がもうかるではないが、三億円事件が日本全国の家庭を、不機嫌で満たし、学校教育の崩壊にまで影響を及ぼしたということなら、事件の影響はとてつもなく大きい。

しかし、こんな不機嫌な世相に飲み込まれず、家庭を明るくし、子育てにも希望を与えるかんたんな方法がある。「わが家の給料日」をもうけて、かつていずこの家庭でも行なわれていた儀式を子どもの前で行なえばよい。また夫婦が、「お疲れ様。ありがとう。」と言えるお互いになることである。子どもたちは、親の生き方を見て学んでいくだろう。

**「すべてのことについて、感謝しなさい。」**

テサロニケⅠ五.十八



## 海尻で家庭集会

九月十九日（金）午後七時三十分から

井出博彦さん宅で。TEL９６－２５３４

## 南相木で家庭集会

九月二十四日（水）午後二時から

日向の中島悦子さん宅です。どなたもどうぞ。TEL７８－２０４７

## 信州から野宿者支援

―第九回　収穫感謝祭・『ひびき』読者交流会のお知らせ―

短い山の秋の終わりに、人影が途絶えた小さな湖のほとりで開く昼食会です。

日時　１１月１日(土)　正午から午後２時

場　所　松原「フィンランド・ヴィレッジ」前広場（長（ちょう）湖畔、小海町音楽堂隣り）

参加費　１人５００円（高校生以下は無料）

＜送付先＞小海キリスト教会にお持ちくださるか、南牧村社協へ。

〒３８４-１３０２南牧村大字海ノ口９６６－１５南牧村社会福祉協議会気付　山谷農場

＊着払いによる送付はご遠慮ください。荷札に「木曜午後送付希望」とお書きください。

**山谷農場事務局**（藤田　寛）小海町芦谷ヒルサイドコーポ一〇二号室毎週金曜・土曜はおります。

電話０９０・１４３６・６３３４

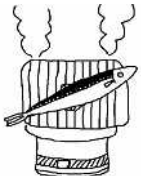
ﾌｧｯｸｽ０４２・７８６・２０８８

メール nyoro@beige.ocn.ne.jp

カンパ:〒振替〇〇二四〇-四-五三七九六

アブラハムの生涯⑧

# 一夫多妻の悲劇



「あれでよかったのか。だが、あの方法しかなかったではないか。しかし・・・。」

アブラムはまたつぶやいた。妻サライの女中ハガルから生まれた子イシュマエルは十三歳。背丈は父に迫り、声も低くなって多感な青年期にはいろうとしていた。我が子の成長ぶりに目を見張るアブラムはすでに九十九歳を迎えていた。長らく子を得なかったアブラムにとって、自分が血を分けた子が日に日に育って行くことは正直うれしかった。

だが手放しにイシュマエルをかわいがることも、イシュマエルを産んだハガルに優しく振舞うこともはばかられた。妻サライの目があるからである。当時の世界で行なわれていたように借り腹をして子を得るようにとアブラムに熱心に勧めたのは、サライ自身であったから、彼女が表立ってアブラムを非難することは少なかったものの、少しでもアブラムがハガルにやさしくしてやると、サライの表情はかたくなり、「どうせ私は石女（うまずめ）ですから。」とつぶやいた。この言葉を聞くと、アブラムの心は沈んでしまうのだった。ここ十三年間、夫婦の間の溝は深くなってきたように感じる。

旧約聖書には一夫多妻の例がいくつも出てくる。出てくるけれども、一夫多妻で万事うまく行ったという夫婦と家庭の例は、ただのひとつもない。一夫多妻の家族には、常に暗い影が落ちている。アブラムの孫ヤコブは四人の妻の間の争いに右往左往していたと記されているし、複数の妻をかかえる英雄ダビデ王は異母兄弟間の殺人事件を発端に、自らの王座と生命も危うくなった。その子ソロモン王は外国から政略結婚で多くの妻をむかえたが妻たちが持ち込んだ異教の偶像が罠となって、神の怒りを買い、ソロモンの死後、王国は南北に分裂してしまう。

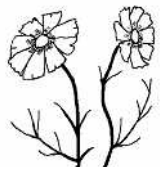
旧約聖書はもろもろの実例をもって、一夫多妻制は夫婦を不幸にし、子どもを不幸にし、社会をも不幸にするという教訓を繰り返し、私たちに与えているのであろう。

イエスは言われた。「創造者は、初めから人を男と女に造って、『それゆえ、人は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となる』と言われたのです。それを、あなたがたは読んだことがないのですか。それで、もはやふたりではなく、ひとりなのです。こういうわけで、人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません。」

神が夫婦二人を一体にされたのである。そこにいろいろな理由をつけて他の者を入れるならば、不信や混乱や不幸をも招き入れることになる。当時の社会では一夫多妻はごく普通の習慣であったが、アブラムが若い日から妻はサライひとりと決めていたのは、神のみこころを知っていたからであろう。けれども、妻に勧められてその禁を破ったときから十三年、アブラムは苦々しい経験をしなければならなかったのだった。

そういえば、○師という伝道者が言っていた。日本の家が暗いのは旦那がどこかで女遊びをしているのではないかと妻が疑わねばならないからである。クリスチャン家庭が明るいのは、妻がそんな心配をしなくてよいからである、と。

# 沈んだ石は浮かばない



筆者は、いわゆる葬式仏教の家に生まれた。釈迦の教えは何も知らず、盆だ彼岸だと追善供養行事に参加するだけだった。キリスト者になって、いったいあれはなんだったのかと、お経の勉強をするようになった。追善供養というのは、生前に天上界に行けるほどに善事を行なわず地獄に落ちている死者が天に移されるために、生きている者たちが、善行を追加するという営みである。だが、『南伝大蔵経』第十六巻上で、釈迦は次のように教えている。

シャカはそのとき、ナーランダ近郊のとある林の中にいた。そこに村長がやって来て、質問した。

「西国のバラモンたちが言っているところによると、彼らは儀式を執り行って、死者を天上界に引き上げるそうです。あなたも同じことができますか。

シャカは応えた。

「湖に大きな石を投げ込んだとしよう。当然、石は底に沈むだろう。そしてその後で、人々が集まって、湖の周りで『石よ浮かべ、石よ浮かべ』と祈願するのだ。すると、石は浮き上がってくるだろうか？」

「いいえ、そんなことはありません。」

「村長よ、それと同じことだよ。生前、悪を積み重ねた者が、死後地獄に堕ちたら、いくら祈願をしようが、彼が天上界に生まれることはない。」

「それからね、村長。今度は、ビンに油を入れて湖に投じたとしよう。そして、ビンが割れたとする。すると油が浮き上がってくる。人々がそこで、『油よ沈め、油よ沈め』と祈願するのだ。すると、油は沈むだろうか？」

「いいや、そんなことはない。油は浮くに決まっている。」

「それと同じことなんだよ。生前に善行を積み重ねた者は、死後天上界に生まれ、地獄に堕ちることはない。村長よ、これがあなたに対する解答である。」（以上要約）

釈迦は追善供養は無意味だと断言しているのである。人が天上界に行き、あるいは地獄に堕ちることは、今、この世に生きている間に決定することであって、死後にはチャンスはないのだと釈迦は教えた。釈迦という人は覚めた知性をもって曇りなく物事を見極めた人だと思う。

キリスト教にも追善供養はない。死者のことを覚えて「記念会」はするが、それは地獄に落ちた死者を天国に引き上げるためではなく、生きている者が亡き人とのかつての交流を偲び、自らも死んで聖なる審判に立つべき者であることを自覚するためである。自覚して、天国に行けるようによい備えをするためである。

私たちは今、生きている数十年という間に、死後の永遠の住まいを天国にするか地獄にするのかを決めるのである。死んでから追善供養してもらえばいいやというわけには行かないのである。主イエスは言われた。

**「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい。」マルコ一章十五節**